
はい、私が魔王です

awa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

はい、私が魔王です

【Nコード】

N8399P

【作者名】

awa

【あらすじ】

なんだかんだで、脅しをかけられ無理矢理魔王にされる主人公。カオスな魔王としての生活に耐え抜くことができるのか

プロローグ

「突然ですが、あなたには『魔王』になってもらいます。」

「・・・」

なんか訳のわからんドラキュラさんらしきものが何か言ってるような気がするけど、これはきつと幻聴だろう

「突然ですが、あなたには『魔王』になってもらいます。」

「・・・」

俺、熱あるのかな

「あなたですよ中村ハルト君」

「え、お、俺ですか」

「この部屋にはあなたと私しかないのになぜ気づかないのです」

「いや、だってなんかわけ解らんこと言ってるわけ解らん生物がいたらスルーした方がいいかなと思ひまして、このくらいふつうの反応でしょう」

「それがふつうかどうかは私には解りませんが、あまりにもひどい行動だと私は思いました。」

とにかく、今日からあなたはこの世界の魔王です、世界の頂点です。

「

なぜそうなる」

「いや、選ばれたからに決まってるじゃないですか」

「選ばれた？」

「そう選ばれたのです」

「なんで？」

「とりあえず城にて説明をするので、移動しますよ。 えいつ」

ドラキュラさん？がそう言った瞬間、俺の視界は光に包まれた。

魔物の世界（前書き）

ちなみに主人公の名前は、2010年の一番多かった名前ランキングの一位の名前にしましたw
はい、関係ないですね

魔物の世界

視界が戻ると、いつもの自分の部屋があった。

そしてドラキュラさんもいた。

「ドラキュラさん」

「ドラキュラ言うな格好悪い・・・ヴァンパイアとよんでください」

「ヴァンパイアさん」

「なんです？」

「なぜ人の話も聞かずわけ解らんとところに送ろうとした！まあ未遂で終わったけど」

ほんと、俺には拒否権がないのかよ

「え？未遂？そんなことありませんよ、ちゃんと移動してますし」

移動した？どう見たってこれは俺の部屋にしか見えないし、物の位置もいつもと同じなのに

「どうも移動したとは思えないんですが、部屋の見た目とか変わってないし」

「ああ、そう言うことですか」

そう聞くと納得したようで説明をしてくれた。

どうやらちゃんと移動はしているらしく、移動した世界（魔界）はもともといた世界にそっくりにできているという

それで、まあ、変わってないと思っただけなのではないかとのこと。

まあ、よく見たら外に竜とかいろいろ飛んでるみたいだからね。

「カオスだ・・・」

俺は思わずそうつぶやいてしまった。

「では早速魔王の仕事について説明しますね」

俺が落ち着いたのを見計らってヴァンパイアさんは説明を始めた。

「ちよつとまで、拒否権は？」

「別に拒否してもかまいませんが、もとの世界には戻しませんよ？
まあ、どっちみち魔王になっても戻す記はございませんが」

「・・・よし、その説明とやらを聞いてやるうじゃないか！俺もあんなドラゴンなんかにおさわれたくないし

あ、そう言えば

「あの、魔王なんだから城とか無いの？」

だってここ『俺の部屋にそっくりな部屋』だよ、ふつうの2階建ての家だよ、こんなところで魔王が住むわけ無いじゃん

するとヴァンパイアさんは

「城？何ですかそれ？食べ物か何かですか？」

だそうだ。

やっぱゲームと現実は違うか・・・

「それじゃあこんなところで魔王やるの？」

まあ、確認もかねて最後にこう聞いてみた
すると

「そんな魔王様がこんな所にすむとでも？そんな分けないでしょう

！ちゃんと『大きなお屋敷』くらい用意してますよ

説明したらご案内致しますから」

そういうことは最初から言ってくれよ

とまあ、謎が解けたので、魔界のルールや、魔王の仕事など、様々な説明を受けて、地獄の一日はおわった。

「この先どうなるのだろう・・・」

と、とても不安な俺であった・・・

初めての戦い

「んゝ朝かぁ」

学校は無いし、起きたくないけど、俺は起きなければならない
なぜかというと

「魔王様、お時間です。早く着替えて朝礼を。」

そう、俺はいま、魔王って事になっている

当然魔王とは魔界の王、つまり、魔界の頂点。

魔物達を束ねていかなければならないので、いろいろな業務があつ
てたいへんだ

とりあえずまず、朝礼に行くことにする。

「えゝ、今日も平和ですが、いつ脅威が来るか解らないので、せい
ぜい頑張ってください」

適当に一言しゃべって朝礼を終わらせて今日の朝礼を終わらせた。

「お疲れ様です魔王さま、今回はちょっとしたお知らせがあります。
いま、『勇者ロト』がこの地を攻めてきているようです。

「ふうんユウシヤねえ・・・」

え・・・攻めてくる？何で？」

「そりゃあ『魔王さま』の命を狙ってに決まってるじゃないですか」
・・・やばくね？

そう言えば俺いま『魔王』じゃん負けちゃうじゃん、死んじやうじ
ゃん、てかロトってドラ○ンク○スト

に出てくる伝説の勇者じゃん勝てっこないよ

そう、途方に暮れていると、ヴァンパイアさんが俺に助け船（？）をだしてくれた。

「魔王様、安心してください。あなたには『特別な力』が宿っています。その力を使って勇者を返り討ちにしましょう」

「不思議な力？」

俺、そんな力持ってたっけ？

「はい、それではその力について説明しますね」

「魔王様は『魔物を召喚する』という能力があります。

しかし、召喚するには条件があります。

それはまず、魔王様の『精神力』が一定以上あること、精神力とはまあ、簡単に説明するとしたら集中力みたいな物です。

次に必要な物は『体力』です。強い魔物ほど、召喚する時につかう体力は多くなりますので、

きをつけないと、魔物が召喚できなくなるので注意してください。

あと、出てくる魔物は『魔王様が想像したもの』が出てきますので、場所に合わせて召喚してください

さいごに、周りの部下達も自由に戦いに出してもいいですよ」

なるほど・・・想像したらいろんなのが出てくるのか・・・よし

「これって『想像したら何でも出る』んだよね？」

「はい、精神力と体力さえあれば」

ほう、それなら

「いでよ！オ○リスク！」

そう言うのと外の庭に巨大な魔法陣が現れ、青い巨人が現れた
あら・・・本当に出ちゃった・・・

「こ、こ、こ、これは!」

ヴァンパイアさんも腰を抜かしている

そして俺は・・・

「はあはあはあはあ・・・死ぬう・・・」

体力が尽きて倒れていた

やっぱこんな物呼び出したらこうなるのか・・・

まあいいや、これでさすがの勇者もやられるだろう

「はあはあ、ヴァンパイアさん、勇者はどっちの方角に?」

「・・・えっと、南西の方角に魔力が集中してるのでそこかと」

「それじゃ、オベリ。クさん、勇者、殺ってきてね」

そう言くとオベ。スクさんは南西の方向に歩いていった

そして、30分後くらいに南西から誰かの悲鳴が響いていたという

初めての戦い（後書き）

ごめんなさいorz

なんか、ごめんなさい・・・はい

夢から覚めて

目を覚ますと、自分はベッドに寝ころんでいた。そういえば、何か変なの召喚して倒れたっけな。

何なんだろうね。何かとてもめんどくさいことに巻き込まれてるよな・・・

助けたところで、自分には何のメリットもないというのに・・・
「帰りてえ」

とりあえず変える方法探さないとな。

こんな世界にずっといたら鬱になりそうだし

それに俺が急に失踪したんだから家族が大騒ぎ・・・
するわけでもない。

だつて一人暮らしだもん。

両親は海外で仕事してるからね

たぶん気づかないだろう

学校は、現在夏休みのため、後一ヶ月ほどは失踪しててもだいじょうぶだろう。

そう言えば、ここに呼ばれた目的は、たしか、勇者の殲滅せんめつみたいなヤツだったよな。

ゲームでの勇者といえば、異世界にとばされる話とかもあったりするから、

勇者と戦ってるうちに何か解るかもしれないな。

果たして一ヶ月で解決できるんだろうか。

それすぎたら、学校無断欠席で親にばれるかもしれないからな。

「あと一ヶ月・・・か」

こうして勇者殲滅の旅が始まるのでした。

夢から覚めて（後書き）

文章まとまって無くてすいません
ちよくちよく出没して書いていきますのでよろしくです。

2月7日 誤字修正

はい、ハーレム作っちゃいました。

「・・・というわけで、旅に出たいんだが」

今日、ヴァンパイアさん呼び出して、勇者殲滅の旅に出たいと申し出たところ。（帰る方法探しについては言わないで）

「okokそんなじゃ頑張つてね」

と、なんか、あっさり承諾してもらい、早速旅の準備をすることになった。

でも、一つだけ条件を出された。

ヴァンパイアさんが出した条件は、軍隊の中で3匹をPTパーティーに加えない。

てなわけで、RPGでの定番の「魔王（ふつうは勇者）」「武闘家」

「魔法使い」「シスター（僧侶）」

達を引き連れることになった。

まず、武闘家sはなぜかゴスロリといわれるとても独特の格好をしていて、それでいて感情が読み取れない、変わった子だった、名前はサラ（吸血鬼）。

歳は・・・俺と同じくらいか一つか二つ違う程度だろう。

魔法使いは明らかに魔法使いには見えないだろう、ふつうにユニ○ロのジーンズに黒いTシャツをきていて、髪は赤色でポニーテールにしている少女はハル歳は見た感じわかりにくい、中学生くらいだろう

シスターは10才くらいだろうか？とても背が小さくて、ぶかぶかの真っ白な修道服を着た長い白銀の髪の毛をした控えめっぽい、印象の少女がルナ

ハーレム一回やってみたかったんだよね

しかも全員美少女やつほい

なんか、ヴァンパイアさんに感謝したいけど仕切れないくらいの感動だ。

残念ながらこれを読んでる諸君は一生お目にかかれなと思うが、だからといって俺を攻めるなよ

見られないのはこれを書いてる作者が絵をかけないからだ。

そして、なんだかんだで旅が始まるのでした。

はい、ハーレム作っちゃいました。（後書き）

ごめんなさい絵が描けなくてorz

あと、自分が小説を書くとき、PCで書いているのですが、書くことが
できる時間が30分しかないのです。

なので、毎回短い話になってしまいます。すいません

自己紹介

「まず自己紹介をしないか」

「やっぱり、挨拶は大事だね、うん、と思ったので、とりあえずそこら辺のカフェらしきところで、自己紹介をすることにした。

「それじゃあサラさんから」

「・・・私はサラ、種族は・・・吸血鬼、早さには自信があります・・・歳は200・・・よろしく」

「200!?こんなに若そうなの?」

「吸血鬼は不老不死・・・老けもしない・・・ある程度の攻撃なら食らってもすぐ回復する」

なるほど、やっぱり吸血鬼は不老不死だったのか・・・

「では、次、ハルさん」

「あ、俺か、俺はハル見ての通り・・・でも無いか、魔法使いだ。炎系の魔法が得意だから火に困ったらいつでも用意できるぜ」

どうやら男口調らしい、まあ、そんな感じしたけど

「ひとつきいてもいいかい?」

「やばい、これ聞かないとなんか後悔する気がする」

「この世界に『ユニ・ロ』ってあるの?」

あるならめっちゃ助かるのだが

「あ、あるけど、てか、俺着てるのもユニク・の服だぜ」

よかった〜これで服に困らない

「質問に答えてくれてありがとう、それじゃあ・・・最後にルナちゃんおねがい」

「は、はい」

「わ、わたしはルナです、みならいのしすたーです。まほうはちょっとしかつかえませんが

よろしくおねがいしましゅ・・・あ、噛んじゃった」
「かわええええええ守りてええええええ」

「よろしくねルナちゃん」

「・・・気持ち悪い」

「うわ・・・」

なんか二人にすごい軽蔑の目で見られた気がするが気のせいだな・

・うん

「最後は俺か

俺はハルトふつうにハルトって呼んでください。特技はバスケット・

・かな」

一応小学生の時からバスケットはやってるのでそこそこ得意だったりする

「それじゃ、自己紹介も終わったことだし、目的地の確認でもしますか」

そう言つて俺はヴァンパイアさんからもらった地図を開く

「えつと・・・あ、ここつて大陸一つだけなのか」

どうやらこの世界は北海道のような形をした大陸のみしか存在してないっぽい

「・・・正確にはまだ見つけてないだけ・・・今後増える可能性もある・・・あと、勇者はここから南の山を越えた先にある大きな町からやってきてる・・・だからそこへ向かうのが私たちの目的・・・」

「

「そうか・・・山こえるのか・・・

よし、それじゃあ結構長い旅になるそうだから道具をそろえるために買い物でも行きますか」

そう、俺が提案したらみんなうなずいたので、旅の道具を集める事になった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8399p/>

はい、私が魔王です

2011年10月8日13時46分発行